

The Japan Society for Intercultural Studies

日本国際文化学会 ニューズレター

第5号 2003年10月31日発行

編集・発行

日本国際文化学会事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

龍谷大学瀬田学舎 松井賢一研究室

TEL/FAX 077-543-7866

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/jsics/>

日本国際文化学会第2回全国大会

7月5日・6日と、早稲田大学において第2回日本国際文化学会全国大会が開催された。

第1回大会よりも多い200名を超える参加者があり、たいへん盛り豊かな議論が展開された。以下、共通論題について報告したい。



1

共通論題1

国際文化教育の新しい方法

法政大学 熊田 泰章

全国50を超える大学に国際文化学部およびそれに準じる名称の学部・学科が設置され、それぞれに特徴あるコンセプトに基づき、独自のカリキュラムによる大学教育を実施しているのであるが、日本国際文化学会としては、その発足大会から連続して、国際文化学部における教育に関する議論の場を設けてきた。今回も、5大学と1組織から

の具体的報告と提言を発表してもらい、国際文化教育上の各大学の共通点とそれぞれの独自性、加えて今後の発展の方向についての議論を行なうこととした。司会（熊田泰章・法政大学）が、以上のような導入を短く述べた後、各報告者から15分ずつの発言、それらを受けて討論者からの発言、最後に会場の参加者からの質問と討論とした。

最初の報告者、高柳俊男（法政大学）は、カリキュラムの中でもっとも目立つ特徴である2年次後期全員留学制度についての説明を主とした。世界9カ国11大学に学生全員を分散して留学させることによるこれまでの成果が、学部の狙い通りに達成されているとする一方、テロ事件や厳しい国

際情勢の影響により、ビザ取得が決して一律に容易なわけではないこと、あるいはSARS等に対する危機管理が問われることなどの問題点を率直に指摘する報告であった。

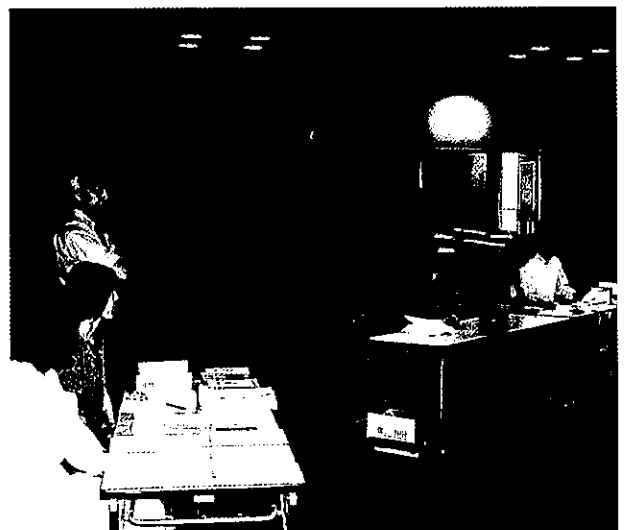
坂本千代（神戸大学）の報告では、外国の大学との授業料を相互不徴収とする学生交流協定による留学生の派遣と受け入れ実施について、その現況と問題を取り上げた。北アメリカ、ヨーロッパ、アジア計11カ国の大学との多様な留学を実現させたが、交換留学が成立するために相互の希望者のバランスが保たれることの難しさ、教員出張の経費負担、留学生のための授業開設と学生寮での交流促進の必要性などに対応していくこと、また、留学を希望するさらに多くの学生の需要に応えるように、協定大学を増やす、奨学金を整備するなどの点を検討中である。

松井賢一（龍谷大学）からは、コミュニケーション能力向上のために行なっている英語教育の改善と留学の実現しやすい制度について報告があった。英語教育においては、ネイティブスピーカーによる少人数クラス、コンテンツ・オリエンティッドの内容での授業を実施している。また、新設のプロフェッショナル英語コースでは、ほとんどの科目の英語による実施、2年次後期の留学必修、卒論を英語で書くことなど、さらに徹底している。留学は、交換留学に加えて、私費留学も奨励しており、そのために私費留学時の授業料を免除している。また、さらに特別コースを設けて留学生をさらに多く受け入れ、日本人学生と留学生が一緒に授業を受ける機会を増やすように検討中である。松田浩志（プール学院大学）は、海外研修プログラムによる異文化間協働の能動的実践がカリキュラム上大きな意味をもつこと、さらに学生にとっては、その体験がその後の進路を真剣に考えるまたとない機会であることを報告した。このプログラムは、ネパール、ミャンマーにおいて、日本語と日本文化を紹介するプレゼンテーション、ならびに現地の青少年との共同作業を行ない、帰国後も事後研修へと連続し、地球市民としての自覚を促すものである。

斎藤敬子（ILCC）は、インターンシップを大学主導で行なう重要な経験教育と位置付け、さらに国際インターンシップとして実施することによって、国際水準のキャリア・ディベロップメント教育の提供ができることを、その実施をサポートする組織としての立場から報告した。今後日本の各大学が異文化間交流の担い手を排出しようとする際に、このようなプログラムを用いて、学生にキャリアスタートの機会を提供していくことの意義は大きい。個々の大学が独自のプログラムを開発する上で、相互に情報を提供しあって、より質の高いものとするように研究会も開いていきたいとの呼びかけがなされた。

最後に、討論者として登壇した内田勝一（早稲田大学）から、2004年度開設の国際教養学部の準備を進めている立場からの問題点指摘と、新しい学部の特徴の報告があった。特に、学生自身に異文化の中での交流体験を積ませることは重要であり、それを留学制度の充実によって進める際には、まだ制度の側の整備が求められているし、必修か選択かによって、それぞれに克服すべき問題が残っているとした。さらに、参加者からの発言を受けて、学生の留学希望と必要な能力獲得が乖離しており、学生のニーズに応えつつも、大学の側が提供する教育に改善が必要であるとした。

所定の時間を延長して質疑応答を行なったが、多くの参加者が深い関心を持つテーマであった。



メディアと国際文化

毎日新聞社 終身名誉職員 阿部 汎

このセッションでは、マスメディア（およびインターネットなどこれに準じるもの）の情報発信によって、国際空間で文化の伝播・移動、相互干渉、新しい文化の形成などの国際文化現象がどのように起きていくかを明らかにし、発信側マスメディアの文化的特質も考察しながら、メディアが国際コミュニケーションに果たす役割を論じようと試みた。

報告は、黒岩徹・東洋英和女学院教授（毎日新聞出身）、渡辺光一・駒沢女子大教授（NHK出身）、加納貞彦・早稲田大学大学院教授（NTT出身）と、異文化コミュニケーション論の鳥飼玖美子・立教大学大学院教授の4会員が担当、これを受けて討論者の卓南生・龍谷大学教授（シンガポールの南洋・星洲聯合早報出身）がアジアの隣人の視点からコメントを加えた。この後フロアからの意見を交えて活発な議論が続き、2時間のセッションを終えた。

まず、黒岩会員は「発信する側の文化—日欧ジャーナリズムの相違点」と題し、欧州のジャーナリズムが日本と異なる点として①報道・論評にあたって歴史と人物を重視する②指導者の言葉の重みと説明責任を重視する（言葉のウラを読んで記事を書くようなことはない）③意見の主張性を重んじる、の諸点を挙げ、言葉によって綴られた歴史こそが欧州の社会・文化を作り出す基本であることを強調した。次の渡辺会員の報告は「『発信力ある文化』の拡大とその問題点—国際空間における電波メディアの支配と競争」。放送メディアは世界の地域文化間の交流と衝突をともに引き起こし、発信力のある文化がラジオ・テレビを利用して影響圏を拡大してきた、というのがその骨子。イラク戦争報道で、強力な米テレビに対抗してカタールのアルジャジーラ放送が独自のメッセージを発信したことが例に挙げられた。

加納会員は「インターネットが創る新しい『コミュニケーション』の形態—グローバルな情報発信・

受信の容易化がもたらすもの」と題し、インターネットの特質として①言語、映像、音声を伝えるマルチメディア②テレビのように参入制限がない③世界中に伝わるグローバル性と、地域の言語によるローカル性を兼ね備えていることを強調した。また、超高精細デジタル記録が古文書、世界遺産などの保存とアクセスに役立つことも指摘した。

各メディアの立場からの報告に続き、鳥飼会員は「メディアの役割と責任—異文化コミュニケーションの視点から」というタイトルでマスメディアを包括的に論じた。まず異文化コミュニケーションの7～80%が表情、服装など非言語手段に依存しているためテレビのインパクトはきわめて強いとして、テレビを握って権力を行使しようとするものが出てくる危険性に触れ、言語メディアについては、英語の不適當な日本語訳やカタカナ語の使用で問題の本質が隠されたケース（日米構造協議、ガイドライン）や、米から「ショー・ザ・フラッグ」を求められたという話が一人歩きした例（英語の使用によって日本の政界と国民への衝撃が大きくなった）を指摘した。

続いて卓会員が、日本のマスメディア報道を永年ウオッチしてきた立場から、次のように批判した。これは日本の文化状況を厳しく論じたものである。

「欧州における歴史重視（黒岩）、ショー・ザ・フラッグ問題（鳥飼）の指摘に感銘を受けた。日本のアジア報道は、アジアの歴史の基礎知識なしに行われる場合が多く、歴史的事実を踏まえられない日本中心の報道も多い。それは日本のメディアが問題に正面から取り組まず、論点を明確にしないことによる。

ショー・ザ・フラッグ問題は外圧利用だが、実は外圧を口実として世論誘導が行われた。しかも、本当はだれもそんなことを言っていないのに、この言葉のねつ造の責任をとったものはいなかった。日本のメディアの、あいまいなまま世論をつくってしまう体質が現れている」。

フロアからは「アジアでは、駐在先の文化を知らない日本の特派員がいる」という発言もあった。その通りだとすると、これは閉鎖的な夜郎自大の文化状況がまかり通っていることになる。

多文化主義の諸相

早稲田大学 飯野 公一

学会第2日目、共通論題3「多文化主義の諸相」と題するテーマの下、三神弘子（早稲田大学）、外岡尚美（青山学院大学）、麻生享志（早稲田大学）の3氏が報告のあと、鶴巻泉子氏（名古屋大学）が討論のうえ各報告者へ質問するという形式をとった。飯野公一（早稲田大学）が司会を行った。

まず、三神は北アイルランドをとりまく事情について、歴史および人口構成について概説し、カトリック系住民とプロテスタント系住民双方が抱く被害者意識（siege mentality）の背景を紹介した。その上で、フランク・マクギネス（Frank McGuinness）の”Observe the Sons of Ulster Marching towards the Somme”（1985）という演劇を北アイルランドに存在するこうしたメンタリティーの構図を象徴する作品として取り上げた。これは第一次大戦に従軍し、ソンムの決戦を戦った8人のアルスター兵士の物語であるが、演劇という「文化」が社会の意識の変化にどのように関わっているかを考察するうえで極めて重要な作品であると評価されている。プロテスタント系作家オー（Orr）が戦死者への思いを残しながらもソンムの決戦という神話を解体しようとしているのに対し、カトリック系のマクギネスはソンムの戦死者、負傷者を神話的文脈の中で記憶しようとしている点が指摘された。

次に、外岡は「アイデンティティのパフォーマンス —— 多文化主義と演劇」というトピックで90年代以降のアメリカ演劇のなかで主に2つの作品をとりあげ、そこで人種、民族、ジェンダーといった諸カテゴリーがどのような役割を果たしているかを議論した。アンナ・ダヴィア・スミス（Anna Deavere Smith）の『黄昏——ロサンゼルス、1992年[Twilight: Los Angeles, 1992]』（1993）は92年のロサンゼルス暴動を題材にインタビュー

を元に構成したドキュメンタリー・ドラマであり、またスーザン・ロリ・パークス（Suzan-Lori Parks）の『血の中に(In the Blood)』（1999）は、黒人のホームレス女性を主人公に複合的な差別を描いた作品である。両作品とも多文化主義の理想とはほど遠い醜い現実を描写しており、アイデンティティ構築の問題を可視化するものとして指摘した。

また、麻生は「白(whiteness)の表象：人種とジェンダーをめぐるアメリカ的想像力」と題し、1960年代の公民権運動以来広まった多文化主義的な思想および政策と、排他的な行動を担う「白」い想像力との葛藤を分析した。例えば、95年のオクラホマ・シティー連邦ビル爆破事件の犯人ティモシー・マグヴェイ（Timothy McVeigh）の愛読書と知られる『ターナーの日記[The Turner Diaries]』（1978）の筆者ウィリアム・ピアス（Dr. William L. Pierce）はアメリカ・ナチ連合、国民同盟といった反ユダヤ人組織を指揮する一方、物理学で博士号を持つ人物である。

彼が表すメディアへの不信、反ユダヤ主義、ヒトラーへの憧憬は、アメリカ社会の多元化と混血化のなかで伝統的価値観が脅かされていると感じる「白」人男性の声を代弁すると指摘する。最後に討論者鶴巻は社会学の立場からアルザスと地域アイデンティティを題材に議論した。アルザス社会が現在直面する支配関係の変容や「所属の場所探し」の問題は、実は三氏の発表の文脈にも見いだせるのではないか。マクギネスは北アイルランドという表象自体の再定義を目指すと考えられるだろうか、「南」側の受け止め方はどうか。多文化主義演劇は社会・人種関係を観客との関係も視野に入れ超越しようとするものだろうか。米国ホワイトネス・スタディーズが所属定義の努力を免れてきた層の危機感を表すとすれば、他者との関係で定義される白い場所はナショナリズム以外に拠り所を持ち得るだろうか、と指摘した。

東南アジアの都市化とエスニシティ

神戸大学 合田 濤

本発表は、東南アジアの地方都市と首座都市における都市化とエスニシティ形成の様態、およびその変容過程に関する社会人類学的な比較研究を行うことを目的としている。特に、都市に移住・定着しつつある地域住民に焦点を当て、地域ごとの民族意識や異民族間関係の変化、地域住民による都市化への対応戦略を検討した。都市化の過程を、単なる近代化と捉えるのではなく、ポストコロニアル批判という視点から再検討したことが、本共通論題の独自性である。

M. ウェーバーの古典的な定義によれば、都市とは一定規模の人口の空間的な集中、工業・商業など第一次産業以外の産業に従事する住民、市場経済の存在によって特徴づけられる。都市の特徴には、血縁や地縁を越えた自発的な非農村的な社会諸関係、住民の異質性、匿名性を加えることもできる。

また、都市化を近代化と同義だとすれば、市民意識や市民的正義論に代表される都市的倫理の生成を都市化と捉える事も可能であろう。

しかし東南アジアでは、首座都市への大量の人口集中が「過剰都市化」として概念化され、大規模なスラムの発生やインフォーマルセクターへの労働人口の集中など、先進諸国とは異なる都市化の様態が指摘されてきた。また、言語・文化集団の地理的な棲み分けや、特定の職業への集中など、都市化がエスニシティを強化するという側面も無視できない。エスニシティごとに形成される緊密な人間関係や都市＝農村の連続性に着目すれば、東南アジアの都市は、都市という衣をまとった農・漁村、多民族・多文化の巨大な集合体だと言うこともできよう。それでは、東南アジアにおける「都市化」とは何を意味するのであろうか。

そこで起きている多様な社会問題は、どのよう

に解決したらよいのであろうか。

こうした問題意識から、我々は科学研究費の助成を受け、平成14年から4年計画で、「東南アジアにおける都市化とエスニシティ形成の社会人類学的研究」(研究代表者：神戸大学教授合田濤・課題番号14251007)というテーマで、台湾・フィリピン・インドネシア・マレーシアおよびベトナムにおいて国際学術共同研究を行っている。

本論題は、その成果の一部を報告したものである。合田はフィリピン・ルソン島の高原都市バギオに移住したボントック族を取り上げ、都市への適応戦略を報告した。移住者は周辺の国有地を占拠し、自力でムラを作って土地権を要求していく。バギオという高原都市は、こうした移住者によって構築されたのである。ここから、都市には正規の市民の他に、様々な非合法占拠者が生活し、しかも市民と非市民の境界が極めて流動的であることが明らかになった。長坂は、マニラに移住したイロカノ族が、印刷業という特定の職業と結びついて強固なエスニシティを形成し、さらに海外出稼ぎ労働者のネットワークとも結びついていることを指摘した。玉置は、同じくマニラ近郊において、都市周辺の先住民アエタが都市に巻き込まれていく過程を分析するとともに、土地問題、NGOなど援助団体の活動との相互行為などについて報告した。遠藤は、マレーシアのクアラランブルを取り上げて、都市空間の形成過程、マレー系・華人・インド系・オランアスリ系など、エスニシティごとの顕著な地理的棲み分けの様態、都市戸籍と次世代の処遇をめぐる問題などを明らかにした。

東南アジアでは、「都市化」という用語が指し示す内容は極めて多義的であり、西欧的な市民都市概念をそのまま適用することには多くの問題がある。「都市化」によって起きる問題は、個別の事例ごとにより詳細な調査が必要とされるのである。

「グローバリゼーションと文化」について

名古屋市立大学 寺田 元一

詳しくは、次号の『インターカルチュラル』の特集でその醍醐味を味わってほしいが、充実した内容のシンポジウムであった。最初は、パネリスト同士も司会もほとんどが始めて顔を合わせるようなメンバーであり、はたしてシンポジウムがうまく行くのか、たいへん危惧された。そこで、一応の道標をつけるべく、最初に私が司会者として問題系の整理のようなことを行った。だが、その整理の方向とは異なる方向へと議論は進み、シンポジウムは司会の予想を裏切る展開を見せることとなった。しかし、逆にそのことで、現代的状況において、文化という捉えがたいものについて熟考する貴重な機会が与えられることになり、結果として、シンポジウムは成功裡に終わったといえよう。

さて、私がシンポジウムの冒頭に提起した問題群は以下のようなものであった。グローバリゼーションとは何か。グローバリゼーションはいつ発生したか。グローバリゼーションと対にさせられた文化とは何か。それはグローバリゼーションの文化か、それとも、グローバリゼーシ

ンに対抗する文化か。グローバリゼーションと文化をつなぐ「と」をどう捉えるか。実際、政治や経済の対抗関係を土台にして、文化レベルでいかなるインターカルチュラルな攻防が展開されているのか。また、グローバリゼーションの文化は肯定的なものか、それとも、否定的なものか。

トップバッターの国士舘大学21世紀アジア学部の梶原景昭さんは、グローバリゼーションという先進国、とりわけ、アメリカによる途上国の文化支配のように見られがちであるのに対し、タイとフィリピンとのグローバリゼーションへの対応を例にとって、少なくともタイは、小国でありながらグローバリゼーションを積極的に利用して、自国文化（料理）のグローバル化に成功していることを示し、文化戦略の組み方によってはグローバリゼーションが途上国にとってチャンスでもある面を指摘された。

次に登場された大坂女学院短大の馬淵仁さんは、グローバリゼーションが異文化間教育に提起している問題とそれへの応答を問題にされた。異文化間教育ではこれまで、文化に

は違いがあるが優劣はないのだから、その違いを認め合ってお互いに理解し合おうという視角から、異なる文化を万博のように陳列することが多く、その間に存在する力関係まで切り込んでいく視点が弱かったこと、相変わらず一部に「国際人になる前に日本人としてのアイデンティティを確立しよう」という議論が強いことなどが、問題点として指摘された。ただ、その過程で確実な変化も生まれており、少なくとも文化本質主義的な議論は全体としては弱まり、「異」や「多」に注目する文化論が広まってきた。

三番目に、中央大学の新原道信さんが登場した。新原さんはパネリスト用の雛壇から離れ、雛壇の前で立って聴衆に向けて話しかけるというユニークなスタイルをとったが、そのスタイル自身が聴衆と結ぼうとする彼の文化戦略そのものとなっていた。まず、世界の諸文化が差別構造の中に置かれていること、それゆえ、文化を語ることで自体が暴力的行為であることを指摘した上で、新原さんは、純アカデミックではなく自分の体を突き抜けた形で文化を聞き語りさわること、そのときそれぞれの文化という島が自立的に他の島と結びつき「島々」を形成する可能性が開かれることを指摘された。文化を語る自己を常に批判の俎上に載せながら文化を語る姿勢が印象深かった。

四番目に登場した法政大学のリービ英雄さんは、グローバリゼーションを主として日本文学の「国際化」という視角から論じられた。それは

いわば日本文学は日本人にしか本当にはわからないし書けないといった見方を根底から否定しようとするもので、万葉集の山上憶良や柿本人麻呂にまで遡って、日本文学がその成立の当初からバイリンガルの――つまり文化と文化の間に立って――に書かれており、その流れは、李良枝やリービ英雄、多和田葉子といった現代の文学者にまで通じているという主張であった。それゆえ、リービさんにとって「国際化」は古来から存在する望ましいものであり、とりわけ、周辺言語を渡り歩くような「でこぼこの世界」を維持した「国際化」の意義を説かれた。

最後に、東京大学の白石さやさんが登場した。白石さんはグローバリゼーションの過程で、かつての国民文化に代わる新たなグローバリゼーション時代の文化の創出という興味深い現象を紹介した。現在世界中で「私はここには属さない」という若者たちが多数登場しており、彼らは従来の帰属の場所から自由に、それぞれの特定の関心に即してグローバルなネットワーク・コミュニティを日夜動的に作り出しており、そのようなものとして日本のマンガ・アニメの文化も存在しているというのである。

以上のように、報告の論点は多岐にわたり、容易に整理できるものではなかったが、それぞれに含蓄に富み、会場に多くの知的刺激を与えた。残り少ない時間で会場からの質問を受けて、最後に若干の質疑応答がなされた。

常任理事会報告

第9回

6月21日(土) 午後1時～5時 於早稲田大学三号館

議題 1. 第2回全国大会について

2. 理事会・総会について
3. 『インターカルチュラル』について
4. その他

第10回

7月5日(土) 於早稲田大学国際会議場

議題 1. 第2回全国大会の運営に関して

第11回

9月28日(日) 午前10時30分～午後1時

於名古屋市立大学人文社会学部

議題 1. 本年度全国大会(早稲田)に関する決算報告など

2. 次回理事の選出に関する決議
3. 『インターカルチュラル』第二号発刊について
4. 次回全国大会(神戸大学)について
5. その他

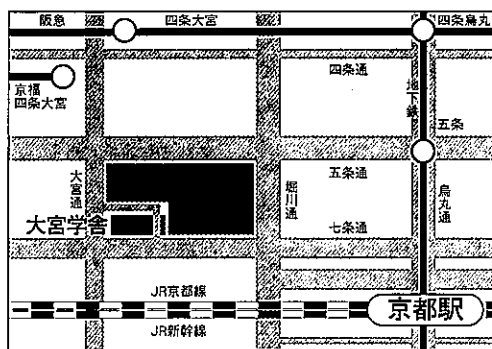
日本国際文化学会 第一回研究会のご案内

会員の皆様にはご健勝のことと存じます。

さて、本学会では活動の一環として、研究会を開催することにいたしました。当面、年に3回から4回の頻度で開催する予定です。

第一回の研究会を下記の要領で開催いたします。多くの会員の参加をお待ちしております。

1. 講師：龍谷大学経済学部 教授 西堀文隆
2. テーマ：「社会科学とグローバリゼーション」
3. 日時：2003年12月6日(土) 午後4時～6時
4. 場所：龍谷大学 大宮キャンパス(2階西翼大会議室)
京都市下京区七条通大宮東入



●JR京都駅から徒歩約10分
参加ご希望の方は、日本国際文化学会のメール、もしくはFAXでお申し込み下さい。

学会誌刊行報告および第2号刊行予告について

学会誌『インターカルチュラル』創刊号は、2003年7月に京都のアカデミア出版会から出版されました。創刊号の内容は以下の通りとなっています。学会誌第2号は、2004年3月に刊行予定で現在編集作業を進めております。

●インターカルチュラル第1号目次

特集：国際文化学をめざすもの

平野健一郎「国際文化学への期待」
小林 哲也「教育・研究の体系としての国際文化学」
岡田 浩樹「日本の地域社会における「文化」への転移と構築」

上藤 文湖「文化とシティズンシップ:都市と外国人の視点から」
北村 淳子「伊沢修二における異文化接触と一言一致」
河路 由佳「戦時体制下の在日留学生教育」
松田浩志他「異文化協働の具現化に向けたプログラムの開発」
佐藤勢紀子「多文化クラスで読む源氏物語」

書評

島根 國士・寺田 元一編
『国際文化学への招待』
(新評論):阿部 汎克

小林 哲也編著
『国際文化学』
(アカデミア出版会):小倉 貞男

平野健一郎著
『国際文化論』
(東京大学出版会):坂井 一成

